

ドルフィンポートの経済効果

～ 鹿児島島の「海の駅」をめざして～

2005年4月

来る4月25日、鹿児島市のウォーターフロントにドルフィンポートがオープンする。この地元期待の施設は果たして鹿児島島の経済社会にどのような効果を、どの程度もたらすのであろうか。本稿では、ドルフィンポートの経済効果と、今後の方向性について検討していく。

ドルフィンポートは鹿児島港本港区の桜島を正面に望むロケーションに、24店の飲食店や物販店がテナントとして入る大型の商業施設である。

例えば、今までの天文館には鹿児島らしい生活文化を、鹿児島らしい雰囲気の中で楽しむ場が少なかったといわれているが、その点でドルフィンポートは、鹿児島を代表する景観に恵まれ、鹿児島の食を楽しめる施設が並ぶことから、地域内外の注目を集める施設となることが期待されている。

4つの経済効果

ドルフィンポートが鹿児島島の経済社会にどのような経路で影響を与えるか考えてみると、以下のよう4つのポイントが指摘出来るであろう[資料1]。

資料1

ドルフィンポートの経済効果
建設工事に係る効果
ドルフィンポートでの消費に伴う効果
天文館との周遊効果
地元の食材、木材、エコレンガなどのPR効果

第1にドルフィンポート建設工事そのものから生じる効果である。これは初年度のみが発生する効果ではあるが、それに伴って発生する波及効果(生産誘発効果)は、筆者の推測では、金額換算で約21億円にのぼると考えられる。

第2にドルフィンポートで観光客や市民が消費することに伴って発生する効果が考えられる。これに波及効果(生産誘発効果)を織り込んで考えると、年間で約39億円の経済効果があるものと試算される。

以下については金額には換算し難いが、第3に天文館周辺との周遊効果が期待される。これまで鹿児島市の中心部は、天文館とウォーターフロントの間の動線が切れていた。しかし、ドルフィンポートが中心市街地の天文館と、観光・商業・アメニティ機能の整備を進めている鹿児島港本港区とを繋ぐこと

で、その間に人の流れや賑わいが生まれ、双方にとって相乗的に集客効果が生まれると期待される。

そして第4に、ドルフィンポートでは、飲食店や物販店を通じて地元食材などを地域内外の人にアピールすることが出来るが、それだけではなく、ドルフィンポートの建物自体に鹿児島県産の木材や川辺町のエコレンガなど地元の素材がいろいろ使われているところに特徴がある。特に、民間企業がこれだけの大規模な木造施設を建設するのはあまり例がない。ドルフィンポートは、その意味で、地元の素材を地域内外の人々にPRする効果があると考えられる。

「鹿児島らしさ」へのこだわりがポイント

最近の都市的な観光を考えると、観光客は、いかにも観光客向けの場所というよりも、地元の人が集まる賑わいのあるスポットであるとか、地元の生活感のある場所に行ってみたいと思う傾向がある。各地の朝市などに観光客が集まるのはその典型である。このことから考えると、ドルフィンポートも地元の人を引きつけながら同時に観光客にもアピールすることが必要となろう。そのポイントは、徹底して「鹿児島らしさ」にこだわることではないかと考えられる[資料2]。

資料2

ドルフィンポートが提供する「鹿児島らしさ」

景観;	桜島、錦江湾
農産物;	畜産品、野菜類、鮮魚・水産加工品
郷土産品;	焼酎、郷土菓子、天然水、郷土料理
工芸品	薩摩焼、薩摩切子、薩摩錫器、紬など
木材;	杉材
その他;	エコレンガ(川辺町)

ドルフィンポートの「鹿児島らしさ」の筆頭はもちろん桜島と錦江湾の景観である。ドルフィンポートには多様なテナントが入っているが、鹿児島の特産品や工芸品を扱う小売店や鹿児島産の食材を用いていることをセールスポイントにしている飲食店などが多く入っていることも特徴である。そして、前述の通り鹿児島県産の木材や川辺町のエコレンガなど地元の素材がいろいろと使われており、「鹿児島らしさ」をアピールしている。

ただ、そこで、ドルフィンポートをさらに一歩踏み込んで、地元の人も観光客も十分に楽しめる「鹿

「海島らしい」施設にするために、「海の駅」の考え方をとりいれるべきではないかと考える。

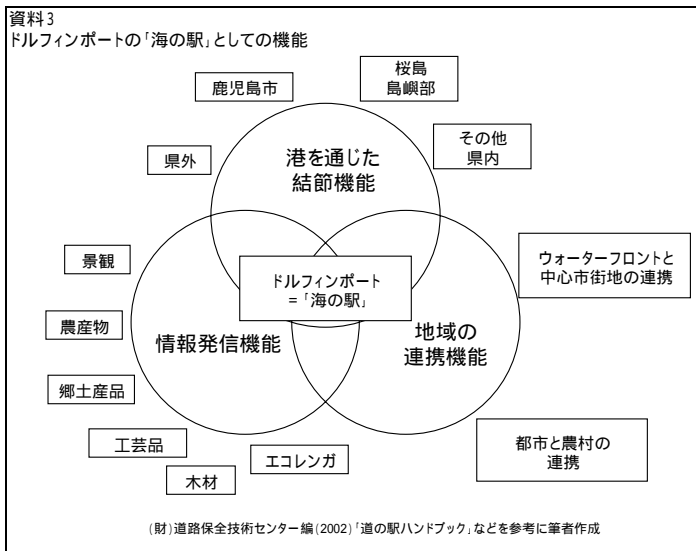
「海の駅」としてのドルフィンポート

最近、「道の駅」が全国各地に建設されているが、「道の駅」は、駐車場・休憩所・トイレなどドライバーのための休憩施設と、農産物の直売所や温泉施設など、それぞれの地域の資源を生かして情報発信を行ったり、交流を行ったりする施設であるⁱ。こういった施設が都市部と農村部の交流を促進している点が、最近脚光を浴びているひとつの要因となっている。

いうまでもなく、この考え方は必ずしも道路施設だけに特徴的なものではない。鉄道駅や港などの交通の結節点や、あるいはもっと広く、人が集まる拠点であれば、ヒト、モノ、情報が出会う「結節機能」、その地域の情報を地域内外に発信する「情報発信機能」、それらを活かして他の地域と連携して地域間ネットワークを拡げる「地域連携機能」といった、「道の駅」が持っている機能を形成することが可能となり、それによって地域の個性に応じた地域づくりが促進されると考えられる。

その意味で、ドルフィンポートが鹿児島島のいわば「海の駅」の役割を果たすものであることを、もっと強調してもよいのではないだろうか。

その考え方をまとめると資料3のようになるⁱⁱ。



まず、ドルフィンポートは鹿児島市の海の玄関であり、県内の離島や沖縄などの結節点である。ここで地域の農産物や、例えば海産物の販売などを通じて観光客などにも「鹿児島らしさ」の情報発信出来る施設としてドルフィンポートを育てることが出来れば、また新たな魅力が生まれるであろう。そして、そのことがウォーターフロントと中心市街地の連携ばかりでなく、鹿児島における都市と農村の連携を促進すると考えられる。

鹿児島市は昨年 11 月に周辺 5 町と合併し、これまで以上に多様な地域を含むことになった。このような状況下で、ドルフィンポートを「海の駅」と捉えることを通じて、都市部とその周辺に広がる中山間地域の農村部が一体となって発展していくことをめざしていく必要がある。

効果の継続性を確保する工夫が必要

ドルフィンポートがもたらすであろう効果を今後も継続するためには、以下の点に留意する必要がある。

ひとつは、当施設が「鹿児島らしさ」の情報を施設全体として発信し、かつ、新しい情報を継続的に提供する工夫が必要とされよう。そのためにも施設全体のコンセプトの管理と、個々のテナントの日常的な情報発信が不可欠であろう。

また、ドルフィンポートと天文館や中央駅との動線を支える交通機関の整備や施設周辺の地域と一体となった環境の整備も重要であろう。その点で、3月に鹿児島県経済同友会が発表した「鹿児島市コンパクトシティ構想」との連動も必要なのではないだろうか。

九州新幹線の開業をきっかけに、去年秋には鹿児島中央駅前に大型商業ビルがオープンし、鹿児島市の与次郎地区などでも新しい商業施設が誕生しようとしている。また、「鹿児島市コンパクトシティ構想」など中心市街地の再生をめざした動きも出てきている。ドルフィンポートの開業はこうした流れの中に位置づけることも出来よう。しかし、この施設の持つ機能を考えるとき、ドルフィンポートを、鹿児島市中心部の商業機能高度化だけでなく、「鹿児島らしさ」を全国にPRし、都市・農村一体の発展の契機となる施設として、地域が一体となって育てていくことを期待したい。

ⁱ 鹿児島県内には、平成 17 年 3 月末で 15 カ所の「道の駅」が整備されている。

ⁱⁱ 「海の駅」に関しては、「道の駅」のような国や自治体の制度は存在していない。しかし、青森県鯉ヶ沢町や中国運輸局などが、このような考え方にもとづく「海の駅」の整備を行っている。

〒880-0805 鹿児島県鹿児島市東千石町 1-38
日本政策投資銀行南九州支店（支店長：澁澤 洋）
お問い合わせ先：企画調査課中村 Tel：099-226-8203